

一遍上人「六十万人頌」をめぐって

岡 本 貞 雄

一遍智真上人（後は一遍とする）は熊野本宮において、後世「六十万人頌」と呼ばれている、以下の如き頌を残している。

六字名号一遍法

十界依正一遍体

万行離念一遍証

人中上妙好華

七言四句からなる本頌は、熊野神から一遍が授かった神勅であろうとする説や、一遍の宗教思想を余すところなく伝えている、全くの一遍の独創であり、時宗教学の根本であるとする説などがある。

しかしその内容については、従来その思想的背景を明確にせず、旧来の伝統的解釈が維持されているものの、それは「六十万人頌」が一遍の創作によるものとして断定したうえでの展開であり、本頌を制するに及んだ経緯や、本頌に至った一遍の思想については、近年ようやく研究が始められた程

度である。その数少ない研究に於ても、見解は非常に異なり、中には一方的に過ぎるようなものも見られる。それだけ一遍の思想が多面性を有しているということなのである。が、少くとも一遍が何を学び、如何なる思想を有して「六十万人頌」を作るに至ったかは明確にしておく必要がある。本論では一遍が有していたであろう思想を推察し、その面から「六十万人頌」について考察してみたい。

『一遍聖絵』によれば、一遍は西山証空門下で当時大宰府に住していた聖達上人の下で十二年の修行を終え、故郷である伊予へ帰り約八年間在俗の生活をしたらと思われる。後世の資料を見ると、妻妾の間で争いを生じたとか、財産問題を起こしたとかいわれているが、定かではない。しかし何らかの理由で在俗生活を断ち、再出家と呼び得る活動を三十三歳の時から始めている。その際、先づ以前指導を受けた聖達上人を訪ね、その後信州の善光寺を訪れている。それが聖達上人の指示によるものかどうかは明確ではないが、『一遍聖絵』の

文章は

文永八年の春 ひじり善光寺に参詣し給ふ（中略）一光三尊の形像如来の密意を表し決定往生の勝地他方の淨域に超えたり 誠に三国伝来奇特言語みちたえ五濁能度の本誓思量ながくつきぬいま宿縁あさからざるによりてたま／＼あひたてまつることを得たりとて 参籠日数をかさねて下向したまいぬ この時已証の法門を顯はし 二河の本尊を圖したまへりき

と記しているから、善光寺で一遍の心中に何らかの変化を生じたのであろうが、それは未だ自己心中の思想整理の段階であつたものと思われる。そしてその心中の整理を明確なものにするべく、伊予へ歸つた一遍は窪寺なる場所に閑室をかまへ、その東壁に善光寺より持ち歸つた二河の本尊をかけ、交衆を止めて、独りで経行し又称名して三年過ごしたという。二河の本尊の横には、己心領解の法門として、後世「十一不二頌」といわれ、一遍の思想を語るうえで常に「六十万人頌」と合せ用いられている以下の頌をかけた。

十劫正覺衆生界

一念往生弥陀國

十一不二証無生

国界平等坐大会

一遍はこの頌の意味を弟子であり『一遍聖絵』の作者である聖戒によく語つたという。窪寺を出た後、菅生の岩屋に参

一遍上人「六十万人頌」をめぐつて（岡 本）

籠し、遁世の素意を祈つた一遍はここに念仏勸進聖としての一步を印し、大阪天王寺へ参籠した。ここで発願をかたくむすび、十重の制文をおさめて如来の禁戒を受け、一遍の念仏をすすめて衆生済度をはじめたという。念仏札賦算もこの時点からといわれている。

天王寺から高野山へ向かい、さらに当時蟻の熊野詣といわれる程、人心の向いていた熊野大社へ向かった。道中一遍の念仏理解を否定する事件があり、それを起縁に熊野本宮に参籠し、熊野神の神勅を受け、それに基づいて作つたといわれているのが、本論の主題である「六十万人頌」である。『一遍聖絵』はそのすぐ後に「又云く」として

六字之中 本無生死

一声之間 即証無生

という偈を記している。ここに於て、一遍の思想は完成したといわれているが、先に記した如く、一遍が何故「六十万人頌」を作つたかについては、ほとんど考察がなされていない。論者は「六十万人頌」とそれに続く偈の内容に、禪的要素が強く表わされていることから、歴史学的には疑問視されつつも強くその関係を主張され続けている。一遍と心地覺心禪師（後は覺心とする）の關係に着目し、その思想の類似点から両者の關係を推定した（『時衆研究』第九一号参照）が、その要点の第一は、一遍が覺心に参禪した際に与えられた公案は

「念起即覺」の語であり、この語の語源を探れば、宗蹟の『坐禅儀』廷寿の『宗鏡録』宗密の『禪源諸詮集都序』を経て『大乘起信論』心生滅門の

覺者謂心体離念

離念相者等虚空界

無所不徧法界一相

即是如来平等法身

という「六十万人頌」とほぼ同一内容の文に当たるといふことであり、第二点は、一遍が熊野神から夢告として得た「信不信をえらばず 淨不淨をきらわず その札をくばるべし」という語が、覺心の作った『坐禅儀』の文中に

無ノ中ニハ 清淨モナク 垢穢モナシ 法トシテ定ムベキモナシ

とあり「無」を「名号」に変えれば、夢告と同一内容となることを記した。

「六十万人頌」の内容に禪が影響を与えていることは以上で十分理解されようが、一点解決されていない問題がある。

それは何故に六十万人という数字を頌の四句の頭に配したかである。この六十万人を一遍は重要視しており『一遍聖絵』巻六の、法印公朝に送った手紙には「南無阿弥陀仏 六十万人知識一遍」と記されており、現代に伝えられている時宗の念仏札には「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と刻されている。時宗では頌の頭文字がたまたま六十万人となったものとい

し、それに基づいて方便として六十万人賦算の目標を立てたとされているようである。二祖「他阿上人法語」巻第五にはこれすなわち名号所具の機法のいはれをあらはす かならずしも数にてはあらずさふらふ 又六十万人は一切衆生の名なり 一切衆生と書ては一生の勧進に相応しがたきあひだ 六十万人すゝめはてゝはまた始めてすゝむるなり

とあり、金井清光氏によれば、室町時代の謡曲「誓願寺」にも六十万人の意味が説明され

これは三熊野の御夢想に四句の文あり その四句の文の上の字を取りて 証文のために書きつけたり……この四句の文の上の字なれば、六十万人とは書きたるなり

とあるそうである。それを受けて金井氏は時宗の伝統教学と同様の解釈をされ「頌文の頭四文字をとって六十万人とし、それを形木にほった」と主張されている。それに対して五来重氏は「一遍と高野・熊野および踊念仏」に於て

六十万人はこのときはじめて形木をほらしたのではなくて、それまでの賦算札の六十万人の四文字を頭においた四句の偈をもつて、一遍は自己の回心を表現したと解すべきである。

とされている。つまり五来氏によれば、六十万人の数字は、熊野以後にすられた念仏札ではなく、それ以前天王寺で配られたと思われる念仏札に記されたものであるとされるのである。論者には、いつ頃から一遍が念仏札に六十万人とい

う数字を記すようになったか判断がつきかねるが、少くとも、時宗教学や金井氏が主張される如く、六十万人を一遍の独創と考える説には反対である。覚心の記した『法語』の第五「齋戒功德之事」という一節に『六齋功德精進經』なる疑經が引用されており、その文中に「午ノ時持齋すレバ 六十万歳ノカテヲ得 乃至功德無量ナリ」と記されており、六十万を最高数とする思想が表明されている。これを受けて一遍は自己の悟りを表現する上に、六十万人を頌の頭文字に配したと思われるのである。この『六齋功德精進經』については未だ詳しく知り得ないが、覚心が当然目を通したと思われる『宗鏡錄』と同一の作者であり、禪淨双修論を展開した永明延寿の『万善同歸集』巻中に

經曰……半齋之福猶生天上 七世人間常得自然衣食 一日持齋得

六十万歳自然之糧

と記されており、ここでは一日の持齋が六十万年の糧を得るとされている。この一日に注目して、一日の持齋を、一遍(回)の念仏とするならば、六十万年の自然の糧は、即六十万人の自然の往生ということにならう。つまり一度念仏称名すれば、六十万人が必ず往生するという考え方が可能になってくるのである。

一遍と名乗ったのは一回の念仏ということの表明であり、それによって六十万人が往生することであれば、念仏

一遍上人「六十万人頌」をめぐって(岡本)

札に記した「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の意味も文面のまま素直に受け取れるのである。つまり南無阿弥陀仏と一度称えれば、それによって六十万人が必ず往生する、ということであり、一遍は何のほからいもなく自己の得たところをそのまま念仏札に記したものと了解されるのである。以上で本論を終るが、未だ何故六十万が最高数であるかの解明はなし得ていない。今後『六齋功德精進經』や『万善同歸集』の引用を詳しく調べることによって、六十万の持つ意味が明らかになってくるものと思われる。「六十万人頌」が『大乘起信論』によるものとの過程となった『宗鏡錄』にも『禪源諸詮集都序』にも、六十万という数字は表れてこない。論者の知り得る限りでは『弘明集』巻第二十一章三世無仏のケ所に

秦趙之衆一日中自起項藉坑六十万夫 古今彝倫及諸受坑者 誠不
悉有宿緣大善

若謂応在将来者 則向六十万命 善惡不同

などと数ヶ所、一度に六十万人が殺されたという記述があるのみである。六十万という数及び『六齋功德精進經』について諸賢の御指導を仰ぎたい。(註は省略いたします)

(大正大学総合仏教研究所研究員)